

サッカ・パンハ・スツタンタ

小野島, 行忍

<https://doi.org/10.15017/2557125>

出版情報 : 文學研究. 3, pp.105-126, 1933-02-25. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



サツカ・パンハ・スツタンタ

小野島行忍

はしがき

サツカ・パンハ・スツタンタ (Sakka-Pañka Suttanta 帝釋問經) は巴利文長阿含 (Dīgha Nikāya) No. 21 に收められ、帝釋天が佛に法を請問し佛が之れにこたへられた事を述べた經であつて、その内容が特異でその結構は巧緻である。而して此の經は上下二卷に分けられ、上卷は序分(一一一三)で下卷は正宗分(一一六)ミ結分(七一〇)ミから成つてゐる。

序分は先づかやうな神話に相應しい道ゆきを以て始められ、次に經文には稀有な『相聞歌』を乾闥婆が謳ふ。この歌は此の經の結集されたころ人口に膾炙してゐた民

謠にあるひは數頌の加減をして此の經にミり入れたものでは無いかと思はれ、詞藻優艶まこみに情味ゆたかな絶唱である。次にこの歌について可憐な情話があつて、一轉して帝釋天ミ佛ミの對話ミなり、帝釋天は佛にまみえるのが宿願であつたこみを述べてからゴーバカの物語をして佛を讃歎し、次いでその歌が謳はれる。この『ゴーバカの歌』はさきの相聞歌に比べて詩趣は劣つてゐるが、然もなほ神韻縹緲たるものがある。而してこの歌の末をうけて帝釋天ミ佛ミの唱和があつて、序分は巧みに結ばれて次をよび起す。

正宗分には衆生不和の根本は諸の妄想なるこみが歸納

的に述べられ、次にその妄想を滅する爲に善き心所に就くべきこと、ついでには戒律を具する爲に善き三業をなすべきこと、ついでには六根を律する爲に善き六境に對ふべきことが説かれ、をはりに執着の不可なること離欲の肝要なることが曰はれてゐる。

結分は漸く理をはなれて帝釋天の述懐となり、刀杖に據つて得た歡喜を難じ、『六果報偈』に聞法向上の歡喜を歎じ、『帝釋歸敬頌』になつて帝釋天が佛に篤く歸敬するところが高唱される。この「尊い帝釋天さへ佛には篤く歸敬する」といふ趣旨は一經に亘つて縷説されてあることで、之れこそ此の經の結集された主眼と見るべきである。茲にその主眼が高唱されてのち急轉して簡潔なむすびで此の經をはる。

巴利文長阿含に收められてゐる經の中にはマハー・パ
リニツバーナ・スツタンタ(Mahā-Pariṇbhāna Sutta)
の如く佛滅(西紀前四八六年)後あまり年を経ずに結集

されたこと見られるものも有るが此のサツカ・パンハ・スツタンタはそれよりよほどの結集であることはその内容から見て明らかなである。而して此の經は佛教文學として勝れて居るばかりでなく、その神話やそれに縷説されてゐる帝釋歸佛の趣旨などより見て、佛教史及び神話史の上で重要である。此の經と同一の傳説から成つたものが見られる漢譯には、長阿含卷第十釋提桓因問經、佛說帝釋所問經、中阿含卷第三十三釋問經、雜寶藏經卷第六帝釋問事緣などがある。余は茲に巴利文より此の經を和譯するに當つて Pāli Text Society 版原典を本としてビルマ版原典及びシャム版註釋を参照してつめて逐字譯にした。

帝釋問經卷上

一

是の如く吾れ聞き奉りぬ。

世尊あるまき摩竭陀に滞りたまひ、王舎城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毗陀山インダ・サーラ窟にまします。そのまき天主帝釋には世尊に見えむこの渴仰生ぜり。

かくて彼れ惟へらく「今いづこに世尊・應供・等正覺はましますか」こ。而して天主帝釋は世尊が摩竭陀に滞りたまひ、王舎城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毗陀山インダ・サーラ窟にましますを見た。彼れ見奉りて忉利諸天に曰ひけらく、

『諸天、かの世尊は摩竭陀に滞りたまひ、王舎城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毗陀山インダ・サーラ窟にまします。いま吾れらかの世尊・應供・等正覺に見えむが爲に詣でなば如何に』こ。

『さなり、卿にさかえあれ』こ。忉利諸天は天主帝釋に諸ひける。

つぎに天主帝釋はおなじく乾闥婆バンチャシカに詣りしに、彼れ亦うべなひペールヅ木の黄なる琴を把りて天主帝釋の隨行に加はりぬ。

かくて天主帝釋は忉利諸天に圍繞せられ乾闥婆バンチャシカを隨へ、恰も力士が腕の曲げたるを伸したのばしたるを曲ぐるばかりの隙に忉利天より隱形して摩竭陀は王舎城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毗陀山に顯れたり。

三

そのまき毗陀山は甚々しく赫き亘り婆羅門聚落アンバ・サンダーも亦然り、これ諸天の神威による。而して四邊の聚落にては諸人かく曰ひたり。

『毗陀山は今まさに火つきて燃え焰上り居れり。何故いま毗陀山はゆゑしく赫き亘り婆羅門聚落アンバ・サンダーも亦然るぞか』こ。彼れら悚れて毛髮豎立したり。

二

サツカ・パンハ・スツタンダ

四

一〇七

(五五五)

さるはぎに天皇帝釋は乾闥婆バンチャシカに曰ひけらく、

『やよバンチャシカ、およそ禪那を行じ禪那を悦び頓に靜居したる如來は吾れごき者には近づき難きぞかし。されば汝いま先づ世尊を怡し奉り、而して後に吾れらかの世尊・應供・等正覺に見えむが爲に詣でなば如何に』云。

『さなり、卿にさかえあれ』ミゴ乾闥婆バンチャシカは天皇帝釋にうべなひ、ペールヅ木の黄なる琴を把りてインダ・サーラ窟にいたれり。彼れ至りて「世尊が吾れより遠きに過ぎず近きに過ぎず在しまさむには吾が聲を聞きたまふべし」にて一方に立ちぬ。一方に立ちたる乾闥婆バンチャシカはペールヅ木の黄なる琴を弾じて、佛ミ法ミ聖衆ミ愛樂ミに綺へるこの歌をうたへり。

五

『日のもころ赫よふバツダーよ』

爾の父御チンバルを吾れ拜む
そは麗女よわが歡びの因なる
おんみを生れさせたればなり

汗づく人にうれしき風
または渴けるものに水
はた聖衆にみ法のごこく
爾われに愛たき天女なり

いたづける人にくすり
はた飢ゑたるものに食
そのもころバツダーよ
もゆるが如きわが思ひを
所作の水もてしづめよ

水冷たく花末みてる蓮池に

日のほてりもて言なけく

やかれし象の入るがごこく

爾の胸臆に吾れいりなむ

また鉤槍かなはぬ象にも似て

やり突棒はわれにやぶられ

目立たしきおんみの美奶に

吾れはいまくるほされて

なす術をさらに知らざるなり

おんみに思ひ泥みては

わが心のさまも變りて

鉤のみし魚かまばかり

たちかへりえざるを

むかも、美しきバツダーよ

サツカ・パンハ・スツタンタ

抱糾れわれを優しき眸に擁け

眞玉手さし纏けよろしめよ

われひたすら之れを欲せり

あゝこの波髪なみかみの愛女いとめづに

わが戀はつゆ和められず

聖衆ひじりに供物のそれに似て

彌いやましに成り行けるを

悉身みすがらうつくしき嬌女たそやめよ

かゝる聖衆ひじりにわが爲せし

善根ぜんこんはすべておんみの共

吾れにその果みを結べかし

身すがら美しきたをやめよ

この世に於いて吾がなせし

功德はすべておんみのむた
われにその果をむすべかし

日のもころ赫よふ愛女よ

釋迦牟尼佛が禪那により

一心・聰慧・正念にして

常住を求めたまふが如く

われはおんみを欲せり

さては釋迦牟尼佛が

無上正覺にいたりて

怡ぎたまふにも似て

よろしめよ吾れも亦

爾ちぎりえて悦ぶ

はた忉利天主帝釋が

御恵を垂れたまはゞ

バツダーよ吾れは爾を

願ひ求めむ嗚呼かくも

わが戀はつよきものを

賢慧し女よおんみの

はな咲みてまもなき

沙羅の如くかゞやかしき

父御をわれ伏しをろがむ

その息女かくもよければ』

六

歌をはりて世尊は乾闥婆バンチャシカに宣はく、

『バンチャシカ。いま汝の歌聲は絃音に和し絃音また

歌聲に和す、而してその歌聲は絃音におこらず絃音また

歌聲に劣らざるを。そもく佛ミ法ミ聖衆ミ愛樂ミに綺

へるこの歌を、汝いづれの時にこり萃めしか』ミ。

『世尊そのかみ成道にさきんじてウルギーラーに滞り

たまひ、尼連禪河の岸なるアジャバーラ榕樹の下に在せ

り。そのみぎり乾闥婆王チンバルに、日のもころ赫よふ

バツダーてふ姫ありけるが、吾れはそを憐れはべりぬ。

然るにかの姫はあだし男を偲べりて、御者マータリの子

シカツデてふ者に思ひを寄せたり。吾れはかの姫を如何

なる手だてにても覓ぎかね侍りしかば、即ちべールヅ木

の黄なる琴を把りて乾闥婆王チンバルの宮居にいたれ

り。吾れ至りてべールヅ木の黄なる琴を弾じて、佛之法

ミ聖衆ミ愛樂ミに綺へるこの歌をうたひ侍りぬ。

七

『日のもころ赫よふバツダーよ

爾の父御チンバルを吾れ拜む

そは麗女よわが歡びの因なる

おんみを生れさせたればなり

……乃至……

賢慧し女よおんみの

はな咲きてまもなき

沙羅の如くかゞやかしき

父御をわれ伏しをろがむ

その息女かくもよければ』

『かく歌ひ了るや、日のもころ赫よふバツダーは吾れ

に曰ひけらく、「わらは世尊をまのあたり見奉らざれご

も、世尊のおんこは忉利天の善法堂にて奏舞のみぎり

聞きまつりぬるを。さても卿が世尊を讃嘆したまへれば

今やわれらは逢はなむ」ミ。而して世尊、その時ならざ

りしが後にかの姫ミ吾れミは逢ひはべりぬ。』

八

さるほごに天帝釋は惟へらく「げに乾闥婆パンチャ

シカは世尊ミ、また世尊はパンチャシカミ、かたみに誼

を結び」ミ。かくて天主帝釋は乾闥婆パンチャシカに

曰ひけらく、

『やよバンチャシカ、汝わがため世尊に「天主帝釋が宰相扈從ミ共に世尊の御足に頂禮し奉る」ミ言上せよ』
ミ。

『さなり、卿にさかえあれ』ミぞ乾闥婆パンチャシカは天主帝釋にうべなひて世尊に申さく、

『天主帝釋が宰相扈從ミ共に世尊の御足に頂禮し奉る』ミ。

『やよバンチャシカ、天主帝釋は宰相扈從の共さきくあれ、幸こそ神・人・阿修羅・龍・乾闥婆また其のほか有りミある諸衆は之れを欲すれば。』

凡そ如來はかゝる上衆には斯く挨拶したまふなり。世尊に挨拶せられたる天主帝釋はインダ・サーラ窟に入り世尊を拜して一方に立ち、忉利諸天ミ乾闥婆パンチャシカも亦インダ・サーラ窟に入り世尊を拜して一方に立ち

ぬ。

九

そのときインダ・サーラ窟は平らかならざるに坦々なり狭きに慨々なり暗き窟内も明るくなれり、これ諸天の神威による。さて世尊は天主帝釋に宣はく、

『かほき任おほく事わざしげき帝釋尊の此處にこの來莅は異しう奇特なり』ミ。

『世尊、われ時長く世尊に見えむが爲に詣でむこゝを願ひまつれり。されど吾れは忉利天かれこれの任こゝわざに暇なくして、世尊に見えむが爲に詣づる事かなはざりき。たゞ世尊あるとき舍衛國にこゝまりたまひサララ舍にまします。そのころ吾れは世尊に見えむが爲に舍衛國に行きはべりぬ。』

一〇

『とき世尊はある三昧に住して坐したまひ、而して毘沙門天后ブンジャチーが世尊に侍り合掌恭敬せり。さ

れば吾れブンジャチーに曰ひはべりぬ。

「夫人、おんみ吾がため世尊に——天主帝釋が宰相扈從に共に世尊の御足に頂禮し奉る——言上したまはれ」こ。

「かく申したればブンジャチーは吾れに曰ひけらく、
「おんみ世尊に見えたまふに今はその時ならず、世尊は
靜居したまへり」こ。

「夫人、よしさらば世尊がかの三昧より起ちたまへる
時わが言つてに——天主帝釋が宰相扈從に共に世尊の御
足に頂禮し奉る——ごん上したまはれ」。世尊、おそ
らくかの夫人は吾がため世尊に言上し、世尊はその辭を
憶念したまはむ。』

「天主、かの夫人はわれに曰ひ、吾れその辭を憶念せ
り。なほ又われは卿の車輪の音によりてかの三昧より起
ちたり。』

一一

サツカ・バンハ・スツタンタ

「世尊、吾等よりさきに忉利天に生れたる諸天あり、
彼れらに向ひてわれ聞き知りはべりぬ、「凡そ如來・應
供・等正覺の世に出づるや天衆は増し阿修羅は減ず」
こ。げに吾れは之れをまのあたり見はべりぬ。如來・應
供・等正覺が世に出でまし、より、天衆は増し阿修羅は
減ぜり。世尊、こゝに迦毘羅城に佛・法・僧を信じ戒具
足せるゴーピカーてふ釋女ありき。此のをみな女心をす
て、丈夫の心をおこし、身壞命終して善趣天界に生れ、
忉利天の儕となり吾れらの公子になりぬ。而して彼處に
てこれ「天子ゴーバカ」ごぞ知られたり。さらに三比丘
あり、世尊の御もにて梵行を修したれども低き位の乾
闥婆に生れたり。彼れらは五欲の快樂を享け有ちたのし
み、吾れらのもごに供御奉仕に來れり。吾れらのもごに
供御奉仕に來りし彼れらを天子ゴーバカは咎めて曰く、
「卿らかの世尊の御法を聽聞せざりしは、そもいづこに
面を向けて居たりしか。吾れこそは女ながらも佛・法・

一一三

(五六二)

僧を信じ戒具足し、女心をすて、丈夫の心をおこし、身壞命終して善趣天界に生れ、忉利天の儕ともがらなり天主帝釋の公子になりぬ。而して此處にてわれ「天子ゴーパーカ」ミぞ知られたり。しかるに卿ら世尊の御もミにて梵行を修したれミも低き位の乾闥婆に生れたり。同法が低き位の乾闥婆に生れしを見むミは痴しごミを吾れらは見たるものかな」ミ。世尊、天子ゴーパーカに咎められし彼れらの二祇ふたりは、既にその生のうちに念を得て梵輔天の位に生れぬ。されど一祇ひとつはなほ五欲に住したり。」

一一

「われもミ具眼ほくけんの優波夷うぱいにて
名をゴーパーカミ呼ばれたり

佛ミ法ミを吾れしんじ

うれしく僧に仕へけり

吾れかの佛の御法みほふに

かしこく随ひたりし故

いま帝釋みこの公子ミして
大なる威力光輝ある
忉利天にぞうまれ得て
ゴーパーカミ茲に知られたり

さて前世には比丘にして
いま乾闥婆の衆ミなり
住める者らを吾れ見たり

げにこれやこの瞿曇みほとけミ
同じ姿さまにてさきの世に
人間たりし吾が身らが
飲食だんじ供養しみづからの
家にて足にいそしくも
仕へ奉もちりしものなるを

佛のみのり受けざりし

おんみらはそも面おもてをば

何處いづこに向けて居たりしか

具眼はとけのさきり御をしへの

法のりはその身に知るべきを

而して吾れたゞ卿たみらに

仕へ奉りてもろくの

尊者ひじりの妙説き、たれば

いま帝釋みことの公子みことして

大なる威力光輝ある

忉利天にぞうまれ得ぬ

されど最尊はとけに奉仕して

無上梵行を修したれど

低きくらゐに生れたる

サツカ・パンハ・スツタンタ

卿たみらの世はあやまてり

同じ御法みのりのきもがらが

ひくき位にうまれしは

あゝ痴事しごを吾れら見き

おんみら乾闥婆生にて

諸天の奉仕に來るきは

曩さきに在家の此のわれの

たかき位をおんみ見よ

吾れこそ女の身乍らも

いま丈夫なり天界の

快樂からくを得たる神なるぞ」

瞿曇ほとけの御弟子ゴーバカに

あひて責められ詰よじられし

彼れらは惱みもだえたり

「いざや吾れらは離欲して

努めはげまむ他のもの、

しもべミな爲そ己が身を」

なかに二祇は精進し

瞿曇の道を憶ひてぞ

こゝに心を淨くして

欲に罪過あるを見ぬ

かれらは象がこめ縄を

破りて逃れ出づるごミ

かち難き魔の繫縛なる

欲の羈絆をたち切りて

忉利諸天を超えゆけり

諸天は帝釋・梵天ミ

善法堂に居たりしが

愛染をすて塵欲を

はなれたる彼の丈夫は

その會衆をこえ行けり

てん主たい釋は天衆の

眞中にありて之れを見て

こゝに焦慮をおこしたり

「げに是れやこのいミ低き

身に生れたる彼れらよく

忉利諸天を超えゆくを」

この焦慮をばいだきたる

言葉をきゝてゴバカは

たいしやく天に申したり

「そも釋迦牟尼に知られたる

佛こそ人げん世かいにて

欲に克ちたるひじりなり

その御弟子にてありつれど

念をはなれて世を更へし

かれら佛子は吾れにより

その念をこそ得たるなり

みたりの中のひじりのみ

なほ乾闥婆のこもがらに

うまれし儘にこゝまりぬ

されど正覺にしたがひて

自性をかく決ちやうし

五欲おさへし二祇こそ

神にも焦慮を起させぬ

サツカ・バンハ・スツタンダ

かゝる御法の開闢こそ

茲にあるなりそれ何を

み弟子のたれか疑はむ

四流をわたりて斷惑の

佛陀・勝者・人王に

われらは歸命し奉る」

げにや世そんの御法を

こゝに覺りてさし登る

彼れらふたりは梵輔天

たかき位にいたりけり

世尊われらもその法を

聽ては得るに至るべし

御肯可あらば請問せむ」

一二三

さるほきに世尊は惟^{ただ}ひたまへらく「げにこの帝釋は長時無垢なり。かれ如何なるこそを吾れにきけばこて、そは凡て肝要にこそあれよ、徒爾ならじ。また問はれて吾がこたふる趣きは、彼れたちごころに之れを領解^{りやうげ}すべし」^しミ。

かくて世尊は天主帝釋にこの偈^{のたま}を宣へり。

『なにを心に欲^たふとも

帝釋天よ吾れにきけ

卿^{たんの}の爲にわれは其の

所問を一々斷すべし』

帝釋問經卷上竟

帝釋問經卷下

一

肯可^{ゆるし}を得たる天主帝釋は世尊にまづ問ひ奉らく、

『さて世尊、いかなる結こそ天・人・阿修羅・龍・乾

闍婆またその他の諸衆にはべるか。彼れらは「われら悲らず苛^こめず争はず害^さはず怨^{うら}まずして過すべし」^ミて然もなほ、悲り苛^こめ争ひ害ひ怨みて過すを』^ミ。

天主帝釋は世尊にまづ斯く問ひ奉りぬ。世尊はこれに應^{こた}へて宣^{のたま}はく、

『されば天主、嫉^{にく}み慳^{けん}みの結ぞ天・人・阿修羅・龍・乾闍婆またその他の諸衆にある。かくて彼れらは「われら悲らず苛^こめず争はず害はず怨まずして過すべし」^ミて然もなほ、悲り苛^こめ争ひ害ひ怨みて過すなり』^ミ。

世尊はかく天主帝釋に應^{こた}へたまへり。心をされる天主帝釋は世尊の御こまばを歡喜信受して申さく『さなり世尊、さなり善逝。われ世尊の應答^{おこたへ}を聞きはべりて茲に疑ひは消え迷ひは晴れたり』^ミ。

二

かく天主帝釋は世尊の御こまばを歡喜信受して、さらに問ひ奉りぬ。

『さて世尊、嫉ミ慳ミは何が因縁ミなり、何より生起

し、その有無は何の有無によるか。』

『されば天主、嫉ミ慳ミは愛憎が因縁ミなり、愛憎より生起し、その有無は愛憎の有無による。』

『さて世尊、愛憎は何が因縁ミなり、何より生起し、その有無は何の有無によるか。』

『されば天主、愛憎は欲が因縁ミなり、欲より生起し、その有無は欲の有無による。』

『さて、世尊、欲は何が因縁ミなり、何より生起し、その有無は何の有無によるか。』

『されば天主、欲は尋が因縁ミなり、尋より生起し、その有無は尋の有無による。』

『さて世尊、尋は何が因縁ミなり、何より生起し、その有無は何の有無によるか。』

『されば天主、尋は妄想の諸支が因縁ミなり、妄想の諸支より生起し、その有無は妄想の諸支の有無による。』

三

『さて世尊、妄想の諸支をよく減するに至る道を得たる比丘は、何によりて爲したるか。』

『天主、喜に親しむべきミ親しむ可からざるミの二者あり、憂に親しむべきミ親しむ可からざるミの二者あり、捨に親しむべきミ親しむ可からざるミの二者ありミ吾れは説く。』

『いま天主、喜ミ憂ミ捨ミにそれ〴〵親しむべきミ親しむ可からざるミの二者ありミ吾れは説くミ曰へり。さて何ミてかく曰ひたるか。こゝに「吾れこの喜この憂この捨に親しむや、惡長じ善滅す」ミ覺ゆるものあり、かゝる喜憂捨は親しむ可からず。また茲に「吾れこの喜この憂この捨に親しむや、惡滅じ善長す」ミ覺ゆるものあり、かゝる喜憂捨は親しむべし。これに尋伺あるものミ尋伺なきものミあり、尋伺なきもの勝れり。』

『かかるが故に天主、喜ミ憂ミ捨ミにそれ〴〵親しむ

べきに親しむ可からざるこの二者ありに吾れは説くに曰ひたるなり。

『天主、妄想の諸支をよく滅するに至る道を得たる比丘は、之れによりて爲したり。』

世尊はかく天主帝釋に應へたまへり。心をされる天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受して申さく『さなり世尊、さなり善逝。われ世尊の應答を聞きはべりて茲に疑ひは消え迷ひは晴れたり』に。

四

かく天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受して、さらに問ひ奉りぬ。

『さて世尊、波羅提木叉の律儀を得たる比丘は、何によりて爲したるか。』

『天主、身業に親しむべきに親しむ可からざるこの二者あり、口業に親しむべきに親しむ可からざるこの二者あり、遍尋に親しむべきに親しむ可からざるこの二者あ

りに吾れは説く。

『いま天主、身業に口業に遍尋にそれ〴〵親しむべきに親しむ可からざるこの二者ありに吾れは説くに曰へり。さて何にてかく曰ひたるか。こゝに「吾れこの身業この口業この遍尋に親しむや、惡長じ善滅す」に覺ゆるものあり、かゝるものは親しむ可からず。また茲に「吾れこの身業この口業この遍尋に親しむや、惡滅じ善長す」に覺ゆるものあり、かゝるものは親しむべし。

『かるが故に天主、身業に口業に遍尋にそれ〴〵親しむべきに親しむ可からざるこの二者ありに吾れは説くに曰ひたるなり。』

『天主、波羅提木叉の律儀を得たる比丘は、之れによりて爲したり。』

世尊はかく天主帝釋に應へたまへり。心をされる天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受して申さく『さなり世尊、さなり善逝。われ世尊の應答を聞きはべりて茲に疑

ひは消え迷ひは晴れたり』。

五

かく天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受して、さらに問ひ奉りぬ。

『さて世尊、諸根の律儀を得たる比丘は、何によりて爲したるか。』

『天主、眼耳鼻舌身意もて知る色聲香味觸法に親しむべきに親しむ可からざるの二者あり。吾れは説く。』

かく聞きて天主帝釋は世尊に申さく、

『いま世尊これを約説したまへれば、吾れその逐一をかく知りまつれり。すなはち眼耳鼻舌身意もて知る色聲香味觸法は、これに親しむや惡長じ善滅するが如きものあり、かゝるものは親しむ可からず。又これに親しむや惡滅じ善長するが如きものあり、かゝるものは親しむべし。——いま世尊これを約説したまひ、吾れその逐一を知りはべれば、茲に疑ひは消え迷ひは晴れたり』。

六

かく天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受して、さらに問ひ奉りぬ。

『さて世尊、沙門婆羅門の凡てがその信念・戒行・欲求・意趣は同一なるか。』

『いな天主、沙門婆羅門の凡てはその信念戒行欲求意趣は同一ならず。』

『如何なれば世尊、沙門婆羅門の凡てはその信念戒行欲求意趣は同一ならざるか。』

『されば天主、世の體は非一種々なり。この非一種々の體より成れる世にありて、有情は如何なる體に據りても固くこれに執着して「これこそ眞なれ他は痴なり」に決定せるなり。かるが故に、沙門婆羅門の凡てはその信念戒行欲求意趣は同一ならざるなり。』

『さて世尊、沙門婆羅門の凡てがその依惡・安穩・梵行・減度は究竟なるか。』

『いな天主、沙門婆羅門の凡てはその依憑安穩梵行減度は究竟ならず。』

『如何なれば世尊、沙門婆羅門の凡てはその依憑安穩梵行減度は究竟ならざるか。』

『されば天主、愛欲を斷じて解脫せる沙門婆羅門のみ、その依憑安穩梵行減度は究竟なり。かるが故に、沙門婆羅門の凡てはその依憑安穩梵行減度は究竟ならざるなり。』

世尊はかく天主帝釋に應^たへたまへり。心をぎれる天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受して申さく『さなり世尊、さなり善逝。われ世尊の應答^{みこたへ}を聞きはべりて茲に疑ひは消え迷ひは晴れたり』と。

七

かく天主帝釋は世尊の御こゝばを歡喜信受してなほ申さく、

『世尊、愛欲は病なり腫なり箭なり。愛欲は彼此の生

を致して人を牽きゆく、かるが故に人は上下せしめらるゝなり。世尊、外道なる他の沙門婆羅門にわれ聞くたよりすら得ずして、長時いただける此れらの問ひを、世尊は吾れに明かしたまへり。而して今やわれに疑惑の箭なるものは、世これを抜きたまへり』と。

『天主、卿これらの問ひを他の沙門婆羅門になされしか。』

『世尊、われ此れらの問ひを他の沙門婆羅門になしはべりき。』

『さらば天主、おんみ障りなくば、彼れら卿^{たのみ}にいかゞ答へしか語られよ。』

『世尊または世尊のごき如來の坐^{たは}しませるや、吾れに何の障りかはべらむ。』

『さらば天主、語られよ。』

『世尊、林にすみ遠く坐臥したれば沙門婆羅門ならむと思はる、人々に吾れ至りて、此れらの問ひをなしはべ

りぬ。されど彼れら明かし能はず、却りて聞けらく「尊者は誰にておはすか」ミ。されば答へて申さく「われは是れ天主帝釋なり」ミ。彼れら更らに聞けらく「そも何すれど天主が此處に來させるか」ミ。吾れ法を所聞所學のまゝ、教へたりしに、彼れらいたく喜びて曰へらく「われら天主帝釋を見奉れり。而して吾れらが問ひに彼れ答へたまへり」ミ。即ちかれら吾が弟子ミなり、われ彼れらの弟子たらず。されど今や吾れは世尊の御弟子なり、入流にして不墮惡趣なり、決定して向正覺者なり。」

『天主、卿が、る歡喜をかつて得られしか。』

『世尊、吾れが、る歡喜をかつて得はべきき。』

『さらば天主、おんみ如何にして斯かる歡喜をかつて得られしか。』

『世尊、そのかみ諸天ミ阿修羅ミの軍起りたりき。さてその軍に諸天から阿修羅まけぬ。その軍に勝ちて吾れ惟へらく「いまや諸天は天界の精華のみならず阿修羅の

精華もこもに之れを享け樂しまむ」ミ。しかるに世尊、吾が得たる歡喜は刀杖に據れるものにして、厭世・離欲・滅盡・寂靜・神通・正覺・涅槃のたよりならず。されど世尊の御法を聞き奉りて吾が得たるこの歡喜は、刀杖に據らざるものにして、一向厭世・離欲・滅盡・寂靜・神通・正覺・涅槃のたよりミなり侍るなり。』

八

『さて天主、卿いかなる果報を惟んみて、かゝる歡喜を得たりミ云はるゝか。』

『世尊、吾れは六の果報を惟んみて、かゝる歡喜を得たりミ申しはべるなり。』

「こゝに神さね在る吾れは
みづから更らに生を得ぬ
かくこぞ世尊しりたまへ」
これ第いちの果はうなり

「人間ならぬ生をすて

神の體よりわれ轉じ

おのが心に欣こころ求もとめる

胎過あやまたず入りゆかむ」

之ぞ第二の果報なる

「所問迷はず御をしへを

喜びくらす其のわれは

慧念たゞしく住すべし」

これ第三の果はうなり

「行住正しきその吾れに

正覺成らば智慧を具し

われ住すべしこれ歸寂」

これぞ第四の果報なる

「さて人間の生をすて

人の體よりわれ轉じ

天上界にたぐひなき

神ミ再び成りいでむ」

之ぞ第五の果報なる

「すぐれし神は榮譽はまめある

色究竟なりそこにこそ

此身このみゆく末すまひせむ」

これ第六の果はうなり

『世尊、吾れは此れら六の果報を惟しつんみて、かゝる歡

喜を得たりと申しはべるなり。

九

『希ねがひたる望みを遂げず

われはたゞ疑ひまよひ

如來みなとけをたづねもこめて

久しくも彷徨^{さまよ}ひにけり

彼等をば離れて住める

沙門ぞミ吾れは見定め

覺^{さと}りたる人なるべしミ

思ひつゝ、近づき行けり

「何すれば得ありやはた

何すれば失は有りや」ミ

問ひたるに彼等はさらに

その道もたづきも知らず

きたりしは天主なるぞミ

吾れを知り彼等はミへり

「なにすれぞ此の處へミ

卿^{たんの}には來たまへるか」ミ

サツカ・バンハ・スツタンタ

われ法を所聞のまゝに

教へしに耳をかたむけ

みなそれを喜びて曰ふ

「帝釋^{ていれ}を己^{おのれ}みたり」ミ

さて佛に吾れ見^まゆるや

疑ひはあまなく消えて

正覺^{あはれ}をこゝにうやまひ

此身^{このみ}には恐れミて無し

天照らす日の親^{おふり}にて

愛欲の箭をぬき給ふ

無等尊・大雄・佛陀

吾れこれを拜^{まが}み奉^{まつ}る

われらかの諸天ミ俱に

梵天になすべき敬禮を

今こそは世尊になさむ

げに吾れら拜みまつる

みほこけは正覺者なり

尊師なり無上の士なり

天のむた此の世の中に

比ぶべき者こてはなし』

十

さるほぎに天主帝釋は乾闥婆バンチャシカに曰ひけらく、

『やよバンチャシカ、汝まつ世尊を怡し奉りしこみ吾

れに裨益おほいなり。汝まつ怡し奉りて後にこそ吾れら

世尊・應供・等正覺に見えむが爲に詣でたり。われ父ミ

なりて汝を乾闥婆王させむ、而して汝懷れたれば日のも
ころ赫よふバツダーを汝に與へむ』ミ。

そのとき天主帝釋は手在地につけて三たび言あげして
申さく、

『世尊・應供・等正覺に歸命し奉る

世尊・應供・等正覺に歸命し奉る

世尊・應供・等正覺に歸命し奉る』ミ。

さて此の宣説のべられたるや、天主帝釋は清淨無垢な
る法眼を得て「いかなる集法もすべてこれ滅法なり」ミ
知れり。而して爾餘の八万諸天も亦しかり。是の如く天
主帝釋請問し奉り、世尊これに應へたまひけり。かるが
故にこの宣説は『帝釋問經』ミぞ名づけられたり。

帝釋問經卷下竟